

ルカの福音書前半のビデオでは、ルカがバプテスマのヨハネとイエスを旧約聖書で語られたイスラエルの物語と神の約束の成就として描いたことを確認しました。そしてイエスが宣教を開始しイスラエルの貧しい者すなわち社会の底辺にいる人々や社会から弾き出された人々に神の国の良い知らせを伝えました。イエスの王国では、イエスはイスラエルの国の貧しい者と人間の社会の価値観がひっくり返されると教えました。このセクションの終わりでイエスは新しいモーセとして描かれ、迫りくるエルサレムでの死を通して新しい出エジプトが来ると予告しました。

さてこの書の中央にある大きなセクションでは、イエスが作られた新しいイスラエルの民をエルサレムへと導きます。このセクションは主にイエスとその旅路で出会った様々な人、特に弟子として加わった人々に語った教えとたとえ話で構成されています。このようにルカはイエスに従うことを旅になぞらえています。イエスと共に人生の旅路を歩きながら少しずつ学んでいくのです。イエスはご自分の宣教に弟子たちを参加させて、先立って彼らを送り出し神の国を述べ伝えさせました。イエスの弟子になるということはイエスの王国の働きに加わり、それを自分のものとする事なのです。弟子たちが戻るとイエスは彼らに祈りや必要を備えてくださる神に信頼することを教えました。イエスはここで他のどの箇所よりも多く、お金や所有物や寛大さについて語っています。

イエスについていくとき、まるで旅人のように持ち物にとらわれずそれを最小限に抑えることで惜しみなく与えることができます。そしてこのセクションのもう一つのテーマは、イエスが貧しい者への占拠の働きを続けたことです。イエスは旅をしながら新しいイスラエルを形作り、その途上で病人や目の見えない人々に出会いました。またユダヤ人の昔からの敵であるサマリヤ人やユダヤ人でありながら、取税人としてローマ側に仕えていたザアカイにも出会いました。社会からはみ出していた彼らは、イエスとの出会いによって生まれ変わり、神の国の共同体に加わりイエスはそれを盛大な宴会にたとえました。イエスは失われた人を探して救うために来たので、人々が神の憐れみを見出すとそれを大いに喜びました。ルカはイエスとイスラエルの指導者たちが同席した実際の宴会の話もいくつか記していますが、彼らはそれを喜んではいませんでした。イエスは宴会で彼らの傲慢さと偽善を指摘し激しい口論になりました。これらの対照的な宴会の様は、イエスが語った放蕩息子のたとえ話に最も顕著に現れています。ある父親に二人の息子がいて、弟息子は愚かにも父を離れ去り遺産を使い果たしてしまいます。しかし後に悔い改めて帰ってくると父は彼を許し、彼の帰還を祝い失われた息子が見つかったと言って宴会を催します。しかし父から離れたことのない兄息子はこれを怒り、こんなろくでなしの弟に対する父の寛大さを苦々しく思います。この有名なたとえ話においてイエスは、ご自分の王国の使命をイスラエルの指導者たちに教えているのです。宴会は神の家族に加わる全ての人たちに対する神の喜びに満ちた歓迎を表しています。そこに入る条件はただ遜って悔い改めることだけです。これによってイエスと彼の逆転の王国を拒絶したイスラエルの指導者たちの悲劇を浮き彫りにしているのです。イエスへの反発が高まっていく中、彼はついに過越の祭りを迎えるエルサレムに到着します。都に近づいた時イエスは泣きました。弟子たちはイエスをメシアなる王として崇めていましたが、指導者たちはイエスの平和の王国を拒絶しました。それがイスラエルのローマ帝国に対する抵抗と反逆へつながり、結果エルサレムは崩壊することをイエスは知っていたのです。イエスが荒々しく神殿に入って行ってそこにいる商人を追い出したのは、その破滅を象徴的に示したことでした。イエスは生贄の儀式を辞めさせよう言ったのです。神を礼拝する場所が強盗の巣にされている。この神殿は滅びる。当然のことながらこの行動は、イエスとイスラエルの指導者たちの間に多くの議論を生み、最後にはイエスがやがてローマがエルサレムを包囲し一世代のうちに町も神殿も滅ぼすと予告しました。その後イエスはご自分と弟子たちだけで過越の食事をしました。これは年に一度イスラエルが子羊の死を通して奴隷から解放されたことを記念する食事です。イエスはその食事のパンとぶどう酒を新しい出エジプトの象徴にしたのです。イエスの裂かれた身体と流された血によって新しくされたイスラエルに解放を与えるのです。この食事の後、イエスは逮捕されてイスラエルの指導者たちから尋問を受け、王を語ったものとして裁判にかけられました。ルカはイエスの無実を強調しています。ロー

マの総督ピラトは、イエスは無実だと 3 回主張した後で諦めました。ガリラヤの領主ヘロデでさえイエスの非を見出せませんでした。それでもイスラエルの指導者たちはピラトを説得して、イエスを十字架にかけました。しかしその後の苦痛の中でさえ、イエスは今まで教えてこられた神の愛とあわれみを身をもって示し続けました。イエスは自分を十字架につけた兵士達に神の赦しを与えました。隣で十字架にかけられていた犯罪者は、イエスが誰なのかを悟っていました。あなたが御国に行かれたら私を思い出してください。イエスの最後の言葉は、このへりくだった犯罪者に希望を与えるものでした。「今日あなたは私と一緒に楽園にいる。」この寛容で優しい言葉を最後にイエスは死に、その遺体は墓に葬られました。そして週の初めの日、数人の弟子が訪れると、墓の中は空っぽで二人の御使いがそこにいました。二人はイエスは死からよみがえり生きておられると告げました。彼らは呆然としてその場を離れました。ルカは次にとても感動的な話を記しています。二人の弟子がエルサレムからエマオという町に向かっていました。彼らはイエスの死に打ちひしがれていましたが、そこに突然イエスが現れ隣を歩き始めました。しかし二人にはそれがイエスだと分かりません。イエスは二人になぜ悲しんでいるのかと聞き、彼らはイエスがイスラエルをあがなってくださいと期待していたのに死んでしまったと語り始めました。しかしその後イエスが二人と一緒に食事をして過越の食事の時のようにパンを裂くと、その瞬間二人は彼がイエスだと分かりました。するとイエスは消えてしまいました。ルカはイエスに従う上で大切なポイントをここで示しています。弟子たちが自分の思いや視点をイエスに押し付けていた時、彼らにはイエスが見えず見知らぬ人でした。イエスの十字架の上で裂かれた身体に現される逆転の王国に従う時、初めて私たちはイエスを見て知ることができるのです。この書の終わりには、また別の食事のシーンがあります。弟子たちの前に現れたイエスは、旧約聖書を引用し、「メシアは人の罪のために苦しみを受けて死に、よみがえりの命をもって悪に打ち勝ち、イスラエルの王になると言われています。」という計画について解き明かしました。こうして 2 章で預言者シメオンが預言したように、イエスの王国はもはやイスラエルにとどまらず、神の赦しは全ての国々に告げ知らされ、全ての人がイエスに従うように招かれているのです。しかしイエスは弟子たちに聖霊が来て彼らにこの新しい宣教を担う力を与えるまではエルサレムで待つようにと言います。

こうしてルカの続編、使徒の働きへと続いていくのです。これがルカの福音書です

## 【要約】

ルカの福音書前半では、バプテスマのヨハネとイエスを通じて、イスラエルの物語と神の約束の成就が描かれています。イエスは神の国の良い知らせを貧しい者や社会の底辺の人々に伝え、社会の価値観を逆転させた王国を宣言しました。中央のセクションでは、イエスが新しいイスラエルの民を形成し、その途中でさまざまな人々と出会い、教えを語り、たとえ話を用いました。また、イエスは病人や取税人、罪深い者たちと交わり、彼らを神の国の共同体に招き入れました。さらに、対照的な宴会の話を通じて、イエスの王国は悔い改める者に広く開かれていることが示されました。イエスはエルサレムに向かう途中で泣き、都市の滅亡を予告しました。最終的に、イエスは裁判を受け、十字架にかけられ、死に至りましたが、その中でも神の赦しとあわれみを示しました。墓からは復活し、弟子たちに現れました。また、イエスの復活と過越の食事を通じて、新しい出エジプトと神の国への招待が象徴されました。弟子たちはイエスを見て知るために自分の視点を捨て、イエスの逆転の王国に従うことが重要であることが示されました。最後に、イエスは弟子たちに聖霊の力を待つように言い、ルカの福音書は使徒の働きに続いています。